

スポーツジャーナリスト  
大宮 久喜

# プロ野球史上 最速を披露した 日ハムの大谷翔平投手



力投する日本ハム先発の大谷翔平投手

©時事

「170<sup>キロ</sup>より170勝を」。注目の大谷翔平投手にエールを送りたい。プロ野球史上最速162<sup>キロ</sup>、その全23球中12球が160<sup>キロ</sup>台。オーラスターという大舞台でこともなげに披露した。

## 世界最速の169<sup>キロ</sup>超えに期待集まる

世界最速はレッズのキューバ出身左腕チャップマンが昨季出した169<sup>キロ</sup>、同投手は今季、非公認となったが171<sup>キロ</sup>も記録した。「大谷なら超える」と誰もが確信する。本人もその気だろう。

取材するたびに、その体も心も順調に大きくなっていく大谷に、一層の可能性を感じる。3年目の今季、チームであるダルビッシュ以来の2ケタ勝利で快調だ。ご存じ二刀流の苦闘にも、「別にどうってことはないありません」と自然体だ。

賛否を論じるのは旧聞に過ぎるかも知れないが、やはり投手大谷に一本化してほしいと思っている。類い希な才能を感じるからだ。194<sup>センチ</sup>、大型なのにバランスがすごぶるいい。打撃で、ムチャ振りせず広角

に打ち分けられるように、ピッチングも腕のムチャ振りでなく、下半身のリードで上半身のスピードを上げていく。

## 投手大谷への一本化を願う

「投手は足腰だ」。彼の400勝金田正一さんなど全ての大投手が口をそろえる。その裏打ちのように、「上半身主導だと壊れる」という実例が数多ある。特に、球速は往々にして「もつともつ」と魔界に引き込むようなところがあり、ウエートトレーニングなどによる筋力頼みで一時的球速アップに溺れ、ついには肩や肘を痛めてしまう。バッテリー間18・44<sup>センチ</sup>。上半身の力が下半身を上回り、たった1<sup>センチ</sup>、1<sup>ミリの</sup>バランス崩れが、捕手のミットでは数<sup>センチ</sup>、数<sup>ミリの</sup>誤差を生み、ストライクからボールへと天国から地獄へと陥る。それが、力みと焦りに悪循環していく。

二刀流、わけても打撃のために「もつとパワーを」という声を聞く。これは安易で無責任だろう。また、取材の過程で、対決するバッターたちの声も聞き逃さない。「160<sup>キロ</sup>

はすごいが、目慣れすれば打てる。それだけでは、けつして怖くない」。たとえ近い将来、170<sup>キロ</sup>を達成しても、それが勝利につながる保証はない。

かつて、取材対象だった江夏は、まだスピードガンのない時代の球宴で9連続三振した際の映像換算計測で159<sup>キロ</sup>を投げているが、「スピードだけでは勝てんよ」が口癖だった。事実、401奪三振の大記録もカーブが4割、シュートが1割あった。伝説の160<sup>キロ</sup>投手と言われる沢村でさえ、ベブルースら相手の8回1失点ピッチングでドロップ（落ちる球）やシュートを多く交えている。スピードが全てではない。

## 西武の菊池投手への憧れから速球に挑戦

大谷は、球速への挑戦は高校の先輩でもある現西武の菊池雄星投手への憧れだったと話している。その菊池は故障し思うような結果を出せていない。他山の石だ。

球界再生の星のような逸材だけに、老婆心も加わりあれこれ気になっている。